

## 創刊のコンセプト

手彫切手研究編集担当  
高野昇郎

念願の「手彫切手専門カタログ」2007年版の発刊を終えた今、積み残された課題は何か。各方面の識者のご意見を伺いながら、いろいろなことを考えて来た。

そのなかで、表現はさまざまであるが、「手彫切手専門カタログ」を使って行く上でも、手彫切手研究会は、一口で言えば情報の公開が不充分だというご指摘が一番多かった。その象徴的なサブジェクトは、和紙黄2銭と和紙紅4銭の版別資料である。

和紙黄2銭は従来、タイプ別の分類に終わっていたが、前回発刊した1997年版から版別に分類して評価することになった。これは、永年、和紙黄2銭を手彫切手研究会の研究課題として担当して来られた島田達雄氏を中心に、この切手が15面の原版で刷られたとの結論が得られたことを受けている。そして15面の版の図案特徴も一覧表として提示することもできた。しかし、和紙黄2銭の場合は、和紙青1銭のように、すべての切手の所属を説明するところまで行っていないし、その目処も立っていない。それは、黄2銭は封書の基本料金用の切手であったから、青1銭と比較して、ペアが格段に少ないうえ、多くの切手は肉眼で観察し難いという難点を持っているからである。キーとなるシート写真とかブロック、コーナー切手などは、コントラストの強い白黒写真で対応すれば雑作ないが、すべての単片を白黒写真に撮って観察することは現実的ではない。それに、昨今は、白黒写真を撮ることも難しくなって来た。われわれは安直な白黒コピーで対応してきたが、黄2銭は白黒コピーでは巧く撮れるものばかりではないので苦労した。さらに、これを実用に堪える形で複製して開示するとなると、さらに難しい。そのうえ、この白黒コピーも最近アナログからデジタルに変わり、身近のコピー機で撮ったコピーでは、ルーペでの観察も十分にできない場合が多い。こういう事情もあり、黄2銭に取り組んでもらえるような資料の開示が、不充分のままに終わっているのが現状である。

しかし、最近になって、このあたりの問題点を解決できそうな状況が生まれて来た。詳しくは、

別の機会に譲りたい。もっともこの方面の識者であれば、常識化していることとも思われるが、一口で言えば、最近の、コンピュータの発展により、肉眼では見難い黄のみを、例えば青とか黒に変換して見やすくしてコピーすることが、可能になってきた。この機能を装着したコピー機も出現しており、コンピュータの専門家でなくても何とかできる時代になったということである。ただ、個人のパソコンで精度のよいコピーを得るのは、まだまだ、使用機器やソフトの問題もあり、依然として難しい。少なくとも編集するには難題であるが、そう言っていたのでは、いつまでも前に進めないで、市井のコピー機や手元の技術で対応できる範囲でスタートしようと決心した次第である。

ともかく、和紙黄2銭に科せられた課題に答えることができる状況ができつつあるというのが、本冊子の刊行を決断した最大の理由である。

和紙黄2銭の話を書き述べたが、和紙黄2銭に限らず、手彫切手の収集と研究には、未使用シートあるいは再構成したシートの写真がもっとも重要なツールである。さらに言えば、和紙墨六のようにシート上の位置不明のものが大部分であつてもシートを構成する単片などを40位置を集積すれば、シートに準ずる役割を果たせる場合も多い。

この冊子では我々の手元にある資料を、整理出来次第、順次公開し提供したいと考えている。さらに、次の段階としては、シートに関する情報がほとんど残されていない切手でも、こういった集積が、意外に大きな役割を果たすことを、実例で示して行きたい。

最近では、入手難となっている感のある、これまで出版されたシート写真集を、複製して刊行することも求められていると思うが、そのためには版權のことなど、解決しなければならないことが多いので、われわれの手には負えないと思っている。ただ、われわれに可能なものはこの冊子を通じて披露して行きたいと思っている。こういった事情であるから手彫切手の収集を考えておられる方は、機会があればぜひとも既存のシート写真集を確保しておいて頂きたい。また、未使用シートなり、再構成シートをお持ちの方は可能であれば